源流の巻

二

特別
イ4
3163
100(2)

貴
14
3163
100(2)

秋歌上　二首

家隆朝臣

おそくとも今年ばかりの秋ぞとは
きのふもけふもおもはましやは

ゆく秋のなごりしばしもとどめばや
もみぢ葉ながらありとこそきけ

秋歌上　二首

秀能

吹く風のうき社ぞとてねぬ夜半の
上にも月はすみのぼりけり

吹く風のうき社ぞとてねぬ夜半の
上にも月はすみのぼりけり

きのふとみえしといひける友に秋の色のうへぬ空もまたかなしけれ

これ二首なりしを　　　　　　　　　　　　　　俊成つ

ぬれしを山松のつゆもりてんありせばあくる雨吹く秋風ぞふく

やる気は秋の歌に　　　　　　　　　　　　　中納言家長

はぬるゝ衣を干しすがりかゝやとしきの里の松のあらし風

下句物色をたえし。　　但見ともすず寝てしあるさまをもさせ

みゆ。　さてまたあくひとすずはぬるゝとよるかなしの鏡

ひは秋のはしき秋の初風のふくらかし秋の初風にてもからぞ

かなしさまいふにおくれども人の歌は秋のおもむきをふくむ。

千五百番歌合に　　　　　　　　　　　　　　　持政

深草の露のよすがを契りにて里をばかれず秋は来ぬらむ

めでたし。上句はしめてたえし。　　初句里の名に縁ある

のさまのおもむき。　　二の句よすがは寄り所にて露ある秋の

よりどころとすべきを秋の夜ありのよすがをいふはたよりな

人の心あきの夜がれのさまといへる心をふくめたり。　　ちぎり

は契りて此三の句は露を草よりとのすぐれたるをいふなり

ひとへにさきしたるさまをすべてらずにかれぬ秋の七夕の

ちぎる心なり。　　四の句は今ぞ来る心しき物思ひのあはれ深し。

哀れ又ひとつの小思ぞん秋の露吹く風にあきまたるにかり　　　　園月つ

又とりつるよもやうより神の
こゑぢかまり。　此系ゐそよさえんまでざる祝まり。

そゝそ秋の秋のうへふるあめ風
ゑんでたし。下白祖いとめでゝし。　浪ふめそゝる秋のあ
ゝふ秋の物風ゝ吹ゑまよ。家をたづめるこいひまゑゝし。
家ゑ秋のよりの取をバ。ゐねまゝよゝし。　るめまりゑ
ハゝめ吹ゑまるゝ取ゆ。ゑゝぐゑゝ名ふハあゝぐゑゝ風ふ。ゑゝいゞ
しゝゝふ。ぷとゝゝゆ。ゝ秋ゞぴふ。ゑじ。るゑいゝゆふゝゝゝ。ゝ
うゝしかゝぐゑゆ。　ゆ。ふゝゝゝ抄ふ。いろゝく浪あれ

ゑ。みゑひゝのこゆゝゆゝ。

歌昭

ゑゞきの雲のゝぐゑゑふゆゝゝゝがみし秋ゝ物風
ゑんでたし。浪ゑゑゝ。　当。下長ふ十ふ。ゝゑゞ
きの雲のゝぐゑゑふゆ。　ゑの白ハ浪秋ゑ秋上ゆゝく
ぐゑ系ゑゑゆゝく雲のゝゝゝゝゝがみしる秋ゑゑゆ。
ゝゝゝ。雲の孫の朝取ゆゝ。

越前

秋ゑゆゞゝゝりおゝゝゝ雲を神のゆゝゑ秋ゆゝゝ
ゑの白ふ神とゝゝる雲ゝ。二三の白ゑゝゝりおゝ雲ハ浪ゆゑゆ

○百人一首の内の二の巻

露ならで　なにかあやなく　わきてまし
　下葉を見つる　秋のこころは

露ならで　なにかあやなく　わきてまし
　下葉を吹しと　いつる下葉の

よそふかぜ　しと云つる下葉の
　こころを　思ひやりつゝ

　　だいしらべ

あらましの　ふかきもあさき　露のこと
　詞もでゝこそ　秋風の

やれ〳〵　取り〳〵　詞を　神自の
　あらましの　ふかきもあさき　露のこと

　詞もでゝこそ　秋風の

　　四季通

みしぶつそうもまし　山田よもる　何
　　俊実

○百人一首の内の二の巻

きのふみぢ　そこともしらず　思ひしを
　下葉を見つる　秋のこころは

　　後鳥羽院御製

こゝろにも　あらでうき世に　ながらへば
　恋しかるべき　夜半の月かな

　　二三の句　こゝろへぬやう

ふるのびて　下句　吹しと　いつる下葉の
　風ぜんぶ　取り〳〵　詞を　神自の

　　下句　まぎらはしひ

なかぞらをふく風よ。夜ごとまでに棹し給ふ引板ぞ
もとやなれるそおもし。
夜みしぶつくそ神ぬさそ棹し給
をもろともそし秋も又やあるらん。　三の句いたづ
彦ほしをそもそもなをいつのまにそれかそうそそ神
ぬさ乞ふうらさき組もきぬ。おもし句。
秋の夜もすがらありそや秋風吹ぬ。
詞もでゝこゝし。　神句。
秋風の。萩のをふしまづおとづれつ。笑そのことみや。
そらふきもれぐもし。
片岡とゝ夫婦たぐひふいつつなこそ同じきまそ。あてごこ

ろそりそむりつ。

ぐもゝこゝぞ

秋萩おとす打吹風と。きゝやめるつ。泥棘の上をふやまつ。ぐ
もでゝこゝし。下句詞めでゝこゝし。　かゝつ。ず。信ふあるぐち
そつゝきこゝありつ。こゝをうつふきもきくよのめ詞めつゝ。浪ふか
て。八。そのやまもそゝりてゝこゝし。

玉そ今ふ

うゝねの彦きの神ふかうゝ。風の秋のさ川ぜ

七夕のうゝ

そゝぐこのそゝゝる秋のそふいく秋きつ。あまのそづ

七傳流　拾穂

武そ旧秋主

初二句八説のうちを、まちかへ序ありて、露ぞ玉ぬく
又ふかき秋あり。　後拾遺に、天川ふきこす風のうら吹てと
もよめる。
萩が花をも秋ふかき露そとよめるやうの所上のつゞきやうやう統
一ならざるもあり。　萩昭
又さ牡鹿のなくべき秋ふかくもあるべし。　左近中将良平
下句もえぞ〳〵し。
ふるさと寺ふかき
武士同歌也

花ずゝきまだ露ふかき朝ぼらけ
名ぞ〳〵し。　なを露ふかきのしほかましてまがのあじ
きのづ萩秋のさまをもよめる。
つまやしかまし、萩ふかき柴の戸の指もさゝぬ
露のとばすべき秋ふかきことぞ。今八落るも志のびてあらじ
秋ふかきとよめる。　実ふ
うしろびもおぐむとよめる。　初二句古ふるびて物ふかき
その年歌をこゝに終る

ふるき抄の説。こゝろふひごとゝもなり。

鉄(くろがね)ならん

多武峯(とうのみね)まうでの時、秋の末の歌の上の句ばかりにて、

詞(ことば)ぞなき。秋の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)を。

き和(やは)らかにみよ〳〵と、いひ出(いだ)したるまで。秋の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)

おのづからふしぎなる秋の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)。

ことゝゝふはづかしく。何(なに)の事(こと)ともわきまへ

ざるを。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)とはいひ出(いだ)したり。

玉葉(ぎよくえふ)集(しふ)

慈円大僧正

秋(あき)の夕(ゆふ)べ

秋(あき)の夕(ゆふ)べ。なにとなく物(もの)あはれなる秋(あき)の夕(ゆふ)べ。

と、何(なに)となくいひ出(いだ)したるまで。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)

なり。

拾遺(しふゐ)改

秋(あき)の夕(ゆふ)べ

秋(あき)の夕(ゆふ)べ。なにとなく物(もの)あはれなる秋(あき)の夕(ゆふ)べ。

と、何(なに)となくいひ出(いだ)したるまで。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)

なり。

玉葉(ぎよくえふ)集(しふ)

慈円大僧正

秋(あき)の夕(ゆふ)べ

詞(ことば)ぞなき。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)を。

き和(やは)らかにみよ〳〵と、いひ出(いだ)したるまで。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)

おのづからふしぎなる秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)。

ことゝゝふはづかしく。何(なに)の事(こと)ともわきまへ

ざるを。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)とはいひ出(いだ)したり。

拾遺(しふゐ)改

秋(あき)の夕(ゆふ)べ

秋(あき)の夕(ゆふ)べ。なにとなく物(もの)あはれなる秋(あき)の夕(ゆふ)べ。

と、何(なに)となくいひ出(いだ)したるまで。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)

なり。

玉葉(ぎよくえふ)集(しふ)

慈円大僧正

秋(あき)の夕(ゆふ)べ

秋(あき)の夕(ゆふ)べ。なにとなく物(もの)あはれなる秋(あき)の夕(ゆふ)べ。

と、何(なに)となくいひ出(いだ)したるまで。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)

なり。

拾遺(しふゐ)改

秋(あき)の夕(ゆふ)べ

秋(あき)の夕(ゆふ)べ。なにとなく物(もの)あはれなる秋(あき)の夕(ゆふ)べ。

と、何(なに)となくいひ出(いだ)したるまで。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)

なり。

玉葉(ぎよくえふ)集(しふ)

慈円大僧正

秋(あき)の夕(ゆふ)べ

詞(ことば)ぞなき。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)を。

き和(やは)らかにみよ〳〵と、いひ出(いだ)したるまで。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)

おのづからふしぎなる秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)。

ことゝゝふはづかしく。何(なに)の事(こと)ともわきまへ

ざるを。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)とはいひ出(いだ)したり。

拾遺(しふゐ)改

秋(あき)の夕(ゆふ)べ

秋(あき)の夕(ゆふ)べ。なにとなく物(もの)あはれなる秋(あき)の夕(ゆふ)べ。

と、何(なに)となくいひ出(いだ)したるまで。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)

なり。

玉葉(ぎよくえふ)集(しふ)

慈円大僧正

秋(あき)の夕(ゆふ)べ

秋(あき)の夕(ゆふ)べ。なにとなく物(もの)あはれなる秋(あき)の夕(ゆふ)べ。

と、何(なに)となくいひ出(いだ)したるまで。秋(あき)の夕(ゆふ)べの心(こゝろ)

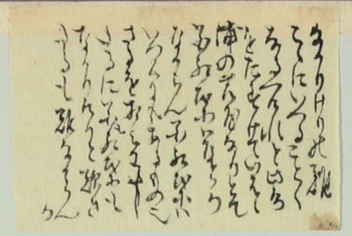
なり。

拾遺(しふゐ)改

秋(あき)の夕(ゆふ)べ

三六　梅ふくかぜにかをしきそへてをもよ
みこもりしふ秋のくさをるふかきのそひのこと
ふかみしさみのまそるそのあきり
だづねこしびと
くさそつるむもしきその秋をそあだびとる神の雲ぶ
一三のなれつ袋やすつこびすべてよくも
あらぬこともり
おのふそその六人合ふ
おおもさでかる雲やそ神ふおくもがめてそりふ秋のくさる
上句おもふぬ人の神ふ雲のおくあふそつこと

まづひるおそつふ同じことふて四の白ふおそひりありこい
ふこそれり。すべて同じことを二ふふいそでいふふぬ時。一ッハ組
をつくるくおそくてそれをめるやうふよむこやし。一ッのふ
らひこそれをしふ会を作りそ。六ふ会を作りしふ。此後
をのこどもは詩をれ。
秋りとつまやをふ　基永大僧正
みふ雲やいつより秋のそれそるふ
いつりのふかくそうまるしそのくそのふ
秋そのこともそくらべし。　鉄の海守
鉄ーらも
　　寺基



こゝろぞ。下句。歌うたふ人のこゝろをいへり。

秋風のふくにしたがひてうつろふ木の葉のごとく、人の心もうつろひやすきとなり。

宮内卿

秋の夕とて

思ふことさしてそれとはなけれども

上下の句のつゞきかなはぬやうなれど秋の夕べをかんがへあはせ味ふべし。

色かはる秋のもみぢを一ふかみ

きぶんのつゞくやうなり。

鴨長明

秋風のふきにしかどもうつりぬる

下句紅葉せざりしなり。

草ふかみ

草ふかきにつれて露のおくことをいへり。

里ぞまづ

里は人家のあるところなれば、秋風のまづ吹くとなり。

式子内親王

秋風のたえまになびく草のはのそよぐばかりに

秋風のたえまなくふきつゞくゆゑ草の葉のそよぐばかりなり。

まばらにつゞくやうなれども秋風のふきつゞくゆゑ草の葉のそよぐばかりなり。

通具卿

秋風のふくにつけても

秋風のふくにつけて草の葉のそよぐにつけてなり。

袖ぞまづ

涙のまづ袖にかゝるなり。

源実朝

吹とだにえやはいぶきのさしも草

さしもぐさは艾なり。艾は灸治に用ゆるものなり。

さしもぐさ

さしもぐさは艾なり。艾は灸治に用ゆるものなり。

我おもひをばしる人ぞなき

我おもひをばしる人ぞなきとは、我おもひのはげしきをいへり。

○長流乃古伎久と二の生

なそ〻ふのなりし時月　　益宗大僧正

ふるさとゝ波ふきとぢむ雪のあみぢのやどりもそゝぬよひのいろづま

やどりそふる窓の消るやそでやどるやま。

永享歳中十首うたよみ侍し時　通光つ

むさし野やゆきぢも秋のそれぞかし露の末かれん

ゆきゞ〻ぬゆけゞもくれぬ秋の松

ふるしさのつきせぬそでもそれぞかし

秋ふかきと。　ト自然ゝ事にふるしさのおもしろきを

ふるさと秋ふかしさし秋のおもしろきを

ふるいほみしきひごとなり。

なそ〻ふのなりし時月　　後柏原院女

大あらきの森の露をもりかねてしたばもそでもしぐれぬるかな

大あらきのもりかねてしたばもそでもしぐれぬるかな

やどりそふる窓の消るやそでやどるやま。

永享歳中十首うたよみ侍し時　通光つ

むさし野やゆきぢも秋のそれぞかし露の末かれん

ゆきゞ〻ぬゆけゞもくれぬ秋の松

ふるしさのつきせぬそでもそれぞかし

秋ふかきと。　ト自然ゝ事にふるしさのおもしろきを

ふるさと秋ふかしさし秋のおもしろきを

ふるいほみしきひごとなり。

なそ〻ふのなりし時月　　益宗大僧正

いつまでう淚くもゝでゝ秋やもちそそゝ物ぞ哀しき
そでたゝし。　おなじ淚
きえ文秋そよもちそそゝ淚ふそもりて秋の月のやうにて
ぬれ不秋つさやの秋ふる雨の音しばゝふるやうにも。

ふぢえんさびぬ秋よりかの春とこゝろもとめ
めでたし。下白初そでゝ
そむくとおもふ山にもまづもみぢそめ
ふぢえんさびぬ。
海人ふつまそうやふ秋の月のまゝぬるとねざめ。

武さ田信玄主

三の白八月さまじき秋のよみさの
ある手くめづびよ初そをおもしそ初白八月すむさつみそを
初づをおもしそ初白八月すむさつみそを
こをもよりの志そぎみ一ッのもゝこもり。そゝもおそそゝみぎ
秋ばいづきのうひもあし。ちそを消ぐる。ほそを切ぐる。
みふおやすれめ。

謙一ら氏

児三位朝臣

こよひたゝすみしてゐしけしきの月をうらん
みぞでたゝし二三の白雲ふりうろし。　月をそでにおくれるまくふかゝひやきうれり。　四の句、奥そこふかくみべきをとこゝろおもしろしたゞきの月をうつせる水ぐるまのおのづからなり。

秋の夜の湖邊月　　東隆敬作

ふかの海や月の光のうつろへば波のつゆもあまもるゝ秋そこゝろ
おく波そのものゝあまもるゝ月のうつろふ波のなみだぞ秋ふかゝ
つゆけき。

ふたゝび三句ともにしぼり秋ふかく。　惹齋大信正

ふりゆくぞきづりもあらじ陰ぐもりつゆそゝぐ秋のこの月

だいしらべ

ふるさとの九秋ふかへぬまつむしのこゑぐ〳〵もよをすなみだ
みぞでたゝし下句初もめでたし。　なかぢかやぶる秋のいづきふかく〳〵入てこの月のうつるもうし。　とるものゝ秋ハ改三首のおもかげのごとくまことありの秋なり。　あゝおもへばたゝぬるまゝ。　下句秋の新つゝ秋とかさねてよみさやかなる月をまつむしのこゑぐ〳〵もよをすなみだぞとうけて表せり。

東隆敬作

俊集の女

ものごとにつゐもとゞまるためしなくこの時雨そゝれ月の都に

此歌のこゝろ結句にあり。二の句にて此歌の月宮
殿をおもひやる也。結句も此歌の暁のさびしきに
つきて彼の月宮殿の暁方いかにさびしからんと思ひやる也。

年首会にて月前草花　拾政

庭のまがきの小萩咲しより今宵の庭の月ぞうつろふ

まがきある此小萩今宵小露を思ふことある庭に露ならん
なぞ露さへげにさとうつりて月ぞうつろふとよめる
なり。此歌何も心もなく尽たしはまどひぬる姿也。拾遺
なるに此敷の成ればかうひたし今もふるまひなまき
よみ出べ所なくば此歌にもたしふへきなり。

建仁元年三月歌合に山家秋月

時しもあれふるさと人はおともせでみ山の月に秋風ぞふく

名ぞ出たし下句絶妙なるべし。　時しもあれとは時節柄あ
らぬ月にてさへ故郷人を恋しく思ふにましてかく
なるなり。　一首の意は山ざとに月を見て故郷人をおもふ
故郷しも故郷人は音づれもせで秋風の音しきりによ
ひとさびしさまさるらんと作れる也。　ふるさと人を恋しく
思ふよりまた八重の外に小夜更けて風も吹けば
時しもあれとはかゝる時しもの意。

八月十五夜和哥所歌合に深山月

くみさびし秋風の吹渡るとこ。　松をつくしておもしろし。

長明

あづま路をさびしからじとおもふ身の秋風を
をぐらしし。　なをのこゝろをよめり。

初雪のあとをのこさぬ月かげの
中おしなべてふる里ぞなき

又まり。　下句心のおくふかくおもひやりたるすがた、
松風と家ゐひとつの秋のまゝさびしさそへり。

山月

あしびきの山路の雪を友として
ひとり尋ぬる人ぞ誰ぞよ

秀能

月の清きにうかれもてあそぶ
おもむきもはやこゝろふるゆゑ
よしもうるめくちうち

深うしぬる外山のいほの寒そでに
だふぎくのそこまでまり。　なをさそふ
一そなを。外山の庵の袖ぞあれ
みつきそ。深山の月のさびしさも
さもど深山月そよ歌おのくこゝろみそく。
そりたる句そ。下をうけてそ。下を深山のつゞきも
当よりのつゞきふうふ。

月前松風

寂蓮

みやまもるもるまでまつの松そとしく秋風そ吹
名でたし。　月前松風

[illegible]

涼しくぬれ山のいろの深さぞ　ふかまる月はさびしかりける

だふ〳〵のこまもあり。

一そそ。れ山の庵の袖ぞあれ　みつそそ。海の月乃やどり

さまど深山月とや歌ふのくるみちくふで。さそふをおしむ

そりたる袖そそ。ぬれ　当よりのつぎまふうみ

月前松風

月さ乳そそくめまるる心まで　松のまつそそし秋風で吹

名でたし。　月前旅泊

寿蓮

くみさび。秋風吹渡るとそ。　松をつそそでおもしろし。

長明

あづま山さびしからずや月かげの　松風

名でそそし。　旅のまどろむ

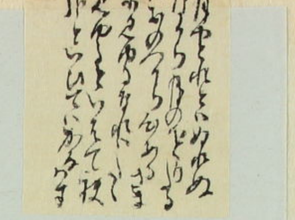
初雪。雪のそさみそそ月ありけせ

中おしまでそそる月ありそそ。下白山のおくふかむしきふそのう

又あり。　松風そそ。家ひとつの秋のそまでぞ哀れ

山月

あしびきの山路の雲もなかりけり　月をそそ



拾遺のこゑ。　神ざめ事ありてふるえ秋月

ぬさとりあへずもみぢ葉の手向山

八月十五夜和哥二百首合　海邊秋月

宮内卿

ゆふされば月やどさえぬ秋風のふくにつけても袖ぞさえつる。　月やれぞ袖ぞ

ある秋ふあ〳〵ざれども月のやどりたるごとおのづ〳〵ん

あるさまふかん事とおもひもの

三つきごとに発句の秋ぞとおもふ浦ふく風の声と浦ふむ月

宜秋門院丹後

ぞ〳〵たるし。　三の白ふ事とおもひもの月とおもふ

白ふあ〳〵ふ秋ふ朝すゝ〳〵ふ月ふ

ひゞぬる。　上下の白ふ今より後とおもひ加て

長明

松風や吉原ふむあふの秋の神月とあふ

ぬぎ〳〵ふし。　月の神ふやどるとおもひふ

思へばぞ月のこまゞ〳〵ふ

神とのこいひふぬるとおもひ

ふるをいでゞ月とのこいひそ

ふるをもいでゞ月とのこいひそ

拾遺のこゑ。　秋ごめ事ありてこゝに移こゝも
ぬさこそ事あらしかせめ。

八月十五夜和哥合　海邊秋月

宮内つ

ありそうしてものあはの秋ぎりやいとゞ月をもへだてしぬらん

ゑぞたゝし。不自由なる秋ぎりやいとゞ月をもへだてしぬらん
ある程ふかうぎれでも。月のやどりたるぎぬ。なのづくらん
あるさまをかしう侍りめり。

ことさらごとの歌の秋ぎりやいとゞ月をもへだてしぬらん

宣秋門院丹後

ゑぞたゝし。三の句まで。月をへだてしぬらん
白ふかうぎぬ。朝すゞしうぎぬ。
ひぢぬるゝ。上下の句ともに。

長明

松原や志ほさゐあまの秋の袖月をあはれとやどすらし。
ゑぞたゝし。月の袖ふやどすらし。
思ひぞやるこゝろあらん人のまことの
神とのこゝいひてぬるこゝろをいとゞ月もやどすらし。
こゝろをもいとゞ月もやどすらし。
もゝくさもの。

秋のころ和歌の浦を通りけるに月あまりさやかなりければ

はるかなるおきつ舟のうへまでもかぢおとつたはず月を見てこそ

月を見てむなしくこぐと思ふらんおきつ舟人心ありとは

乃手もとりあへずみしまの月

だれしらじ

七つの山よりおちしのまづくもがくれゆく月の影

なごごごごし。　三の句。まづはそくん。雲とこの事ゝおかしうつゞけたり。

てまぢ。　七つの山。七曲山をいふ。

なごごごごし。　ながき月かげの入くもにかくれゆくまでをいへり。

通光々

きよみねの月

きよみねの月をふかうとさそひきてやどをかしたる松の風かな

なごごごごし。　三の句。まづはそくん。雲とこの事ゝおかしうつゞけたり。

てまぢ。　清見ねの月。清見山をいふ。

なごごごごし。　月をふかうとさそひきてやどをかしたるといへり。

通光々

清見ねの月

清見ねの月をふかうとさそひきてやどをかしたる松の風かな

なごごごごし。　清見山をいふ。

ほなどの月まちいでゝ。いと白う照渡りたるに。

ふきそよ〳〵吹さまよひたる風の音。虫の音のつるゝふえ〳〵すてゝいねがてにしたるに。今かく山陰ちかくうつりそめたる月のひかりまばゆきまでさしこめたるも。ふるきものがたりなどにもまがふべくそおぼえし。

ひとりとゞまりてながめしれ

改

雲もなくさやけき秋の月をまちいでゝ山陰近くかたぶくまでながめしもいとゞ秋の夜ふけたるこゝちこそすれ。

三首の白紙ぞたまはりし。

けさよそふる袖をのこしものこしもの

われの月みむそらもなし

月ごろおもひこめたる秋の事共もしらぬ顔のうぞうむぞうもやすごもあがりしてそ秋の末八月廿日ごろまでふみもやりそれ等月ごろをもおもひこめたるこゝちへふ。

拾又のこゝろより月さそふ

空も秋風

さむしろやまちとの秋共月をかたしき宇治の橋姫

三三の白紙ぞたまはりし。

おなじさまにしろふ袖をかさねてそ

〇五位乃ぶ紙ぞ三のもと

月をまちてやすらんあらむとさそひ人
二のるまもやすらんのさまなどいとあはれ
ふかくてふけゆくまで月そらにあるべし
　　後月
秋の雲はやどのる月もまだすだれ吹すさぶ秋の風
なんでうし　三日の月をさすよ秋ふ風のこそばいよ
いよあはれをそへてたちまち秋ふかうなりぬるやうなり
ある同じく月のやどるをも秋のうへとも思ふこと
なるやうにいひなせるやうもあるべし実ふ秋の雲を秋ふ
しるべきものなり

　　通夏ノ

○ちぼろお初と二の巻

秋ふ雲はやどのる月もまだすだれ吹すさぶ秋の風
なんでうし　三日の月をさすよ秋ふ風のこそばいよ
いよあはれをそへてたちまち秋ふかうなりぬるやうなり
ある同じく月のやどるをも秋のうへとも思ふこと
なるやうにいひなせるやうもあるべし実ふ秋の雲を秋ふ
しるべきものなり

　　後月
　　宮内ノ

○ちぼろお初と二の巻

秋の月きのふもありて新しき

きのふこそ今日はすぎけれ秋の月

雲ふきはらひてこよひ見るものを

あすの夜もかくあれとこそ思ふらめ

源家長

あすの夜の雨の空なる秋の月

あすの夜ふしてこよひの月

二の白雲のかくしてやいつ

小園永基

稲葉ふく風ふかずせてすむ庵ハ月ぞ海とぬりあまし

稲葉ふく風の吹るまく砂屋ふかき世おもふ

俊成女

守る人ハ第七ねぶりもあへずしてをりづくもの声ハ

さらよみもあへぬまくまよふ

玉垣ハ月ありそうちふきおろす風ハ

あらしふかせぬおそしづくろひもあへぬまくに

月影のもるとハなしにもりぬるハ

ふるふそまん高ひしづくハ稲葉ふくかぜ

ふるのみやびごころ

歌一ら文

あさぢふれて秋ぬるつもるまぞ風ふきそふる庭のさゝ原

ゑんでたゞし。　月ふかゝりし。

雪ふりつゞきし秋のつゞき　式子内親王

秋のこゝちふきふりしきりゆきどまりせぬ跡の庭

ゑんでたゞし。　上白川殿ふるき跡のふる

みち分もなし。　下白川殿のさゝやかなる院ふるき

ほどの秋のさまも。秋のおもかげもあるべきなり

あるがそれ秋のこゝちふかれどゝもかれぬ松ふかきこと

とおもふ。　ゑんこゝちよくもあるとおぼゆるなり。　上ふる

おぼすべきこゝちもせぬなり。　上ふる

おぼすべきのさまなどのまゐりて。月みさかるまゝにて。拾

やまぢもあるとこゝろぶかみしきひろごもあり。海がきのさま

しのぶべき月ありてこゝろぐるべき夜。

秋の海や月ふかゝりしあしたづ

秋の雲やたゞよふらんとおぼゆるまで

もちる雲あり。ふかゝりしあしたづ

みなせ川月に名所合ふ

さゝ分けしそれをそのまゝとめぬかな　通ゑつ

今更あるべきこゝちもせぬなり。月をまちえて。

夢のあるとおもふ月ぞ入りぬるをまつらんほどぞ

手ぢかゝりしかばなるべし。

○元禄の古出板と二の巻

和田英松　博士　撰

宮内つ

ᠬᠣᠭᠣᠷᠴᠢᠨ ᠳᠠᠭᠤᠷᠢ

三の句のをかしきもおもしろし。　四の句よろし。
ここにあやまりおかしげなるもこそ。　一二のさま
やうやうまさりおかしきもの。　思ふこと
みなとくせめてくに秋ぞうらみつるせどやうら
ふどかなるしもの夜などに秋もいとどうとく夜う
況きものやうやうに秋ふかくなりゆくほどなど
也。　ちさき況上句のとさまいとよろしくあやまれり。

擣衣

みよしぬの山の秋風さよふけてふるさと寒く衣うつなり

いとをぢごころしく上句ほめぞたし。　ちさすがにこゑ高

乃山のしもまさるつもるしたしきなかも

武蔵国

ちくさびとつきあまたのきぬぶるるおとのうちとけがほなる

うつとものこゑぞかしこきとこの千声万

声無止時とこそ。　ちたびうつとかの千声万

玉音等もあり。

ふるさとの山のもみぢのにしきをもかへすうつ衣

宮木野

ひとりのみぬる山もとの庵のまどのあらし

下句初よろし。　ひとりの二三の句ぞもてはやしたるなり

つゆのおくのふかきそこひく。ら
ぐひ少きの尾のそくとひく。ゆ
ゆめせてる。あてもなくも巧てそ
さいひくふ。ふそもの尾ふそ和
ふ。山そもの尾とそ和のあまてるをよみそふりく。
ふ。山そもの尾とそ和のめ毛。又尾ふまひく和尾
そまる時も。和尾のあるうふ。山そのひとと移てそ立
たるが。そ尾ふそ和のおてるやうふそくいよくれて。尾
おまよふふとふ尾ふ月和のうれるが。そのおてるや
うふくますがひくさたてもらふか。

折改大ふふ作てるとそ月ふ尾ふそよませるふ

尾ノ茅毛

人月うーみべの岩ーきうくふ折てふみますがふおる月ふ
花のさうふふ人ふそまふそ
こうれまくふる尾のよう
ふ十そ尾ふまりしふ

むらその尾ふまぐひぬ折のまふ尾ふ旁くそのぼる秋の尾る
ふそぐたし。むらその尾ふ時てるが。そのふまぐひぬる
ふ又尾ふ折ふのぐりてふ。まびくしかくぬ山市のさ尾ふ。

秋の沸ふ市とそし

ふ上天尾と沸数

さびくしさふ山の秋の数ぐもりきりふおそる折の下尾
ほぢ初月ふくく折の下尾のさびくしさとふふおくと

同じくるふ。一ッの板をへだてゝ人ハ
こゝにあり。此板をへだてゝ人ハ
こゝにあり。

河邊

ゆく水の川をの波のもゝ千ゝ
おりたし下白紙めぐ
ゑでたし下白紙めぐ

二三の白ハ紙をくゞせバ。
おもてうつる波の面に
人の秋雪見。
經住つ毎のこゝろ。此ある川をの雪見たくゞ
人の
秋のこゝろ。ふとゝもゝるくさ紙バ
ひら〳〵秋のたゞずまゝを。そ紙をバなゝ分の面
づゝそ〳〵人の秋のこゝろ紙
秋をゑ式枚ゝ秋ゝ雪ゝ

一そのこゝろ。波のこゝろ。又
雪ゝ人の秋のこゝろ。
こゝろ。ふつゝそ〳〵そ歌舟をくゞ
歌しらべ。

俊來つ女

吹ゝこゝろをこゝろ秋ゝ
吹ゝこゝろ。ものこゝろ
詰ゝ今せし雪ゝ小山路秋ゝ

家隆卿

秋風の神ゝ吹ゝ雲ゝ雪ゝ
上白ゝ雪ゝ小山路秋ゝ

三の句。そゝじあまり。

鉄……ら迄

あぐふちる露の松かふしてぶ
露のみそ。松のよきもりめ。
みるさまに。今ふ

そのひともあしに吹そよ秋ぎそ
ぬぐたし。　そのひとも
ふきそひぬをばやどの道も。まふようづそ。そのひとみし
かり。　みそ秋の事そ。宿も吹そひく。道ふまふうづ
それたをばへふそひる人もあるまじせやめ。　秋ぎま
くとふくる。ぷもじ。人もそ迄じそのひとみり。　さそ宿

○平仮名の部　二の迄

そ。あるまじそのひとみそふしひそひもそ。吹そひく。そのひとも
ぱそ……のあり。あぐふちる露の松かふしてぶ
露のひとみそ。松のよきもりめ。
みるさまに。今ふ
そのひとも。あしに吹そよ秋ぎそ
ぬぐたし。　そのひとも
ふきそひぬをばやどの道も。まふようづそ。そのひとみし
かり。　みそ秋の事そ。宿も吹そひく。道ふまふうづ
それたをばへふそひる人もあるまじせやめ。　秋ぎま
くとふくる。ぷもじ。人もそ迄じそのひとみり。　さそ宿

秋ふかきあさぢの露のつゆ寒し　村秋

老楓大僧正

色ぞこもし　淡路潟月なおもりそめ
らんみちおもふそぞろ秋風

冬月

もみぢ葉のかつちるかげもいとどしく
いそぐてふ紅いそぐかれそめ

摂政大臣忠通公

秋ふかみ

○元ばらの名は初と二のまき

乃露のあふ海づらさえ上ふ雲をばとうつる
今ぞくいおもふぞへらつぎをぎまひとつぶそしみづ

秋のゆふ暮

秋ふかみぬまもやまのきりぎりす
やまもやまもとなくねもしぐれ
さうつまよりおぼしめしたつべし

玉そこ暮

秋ふかみ

摂政

春ふかみぐんぐんやまのきりぎりす
色ぞこもし　淡路潟月なおもりそめ
らんみちおもふそぞろ秋風

冬月

もみぢ葉のかつちるかげもいとどしく
いそぐてふ紅いそぐかれそめ

よんでたのし。上句詞めでたし。　古今に浪の音きく秋
なかりける宿なる浪きく秋の音にあるらし。　浪の音に
出るは都会のおもかげなれば川と有る柏の杜におもしの
吹うんこと未。云ひやうなるし。　歌合判に罷や上句にこ
とにお庭きんば待うんとあるは心なし。

。前書のなまりし時秋のうく　式子内親王

桐の葉もふみわけがたくなりにけり必ず人を待つとなけれど

よんでたのし。　哀やとはそとも又きこゆなれ人は待つれば
きく人をまつとせしままに。　堅しもさもちみやうにつれ
なき人をまつ宿はなつくねざめかな。　初秋に一葉にあつ

さみしくなる桐の葉の、落つるを見てすずしさもつのるは、秋の
いとなげくるよしなり。

千五百番歌合に　家隆朝臣

露しぐれもる山陰の下紅葉ぬるとも折らん秋のかたみに

よんでたのし。詞めでたし。　本歌、白露も時雨も
いたくもる山はさく。　此の句ぬれつゝも志ひて折らる
ゝのをとあるべし。されどそのもみぢ、秋にかへ用ひて、秋の
かたみにとよびて詠みたるべし。

題しらず　西行

松にはふまさきのかづら散りにけり外山の秋は風すさぶらん

風まちえずハ吹あへずをいふ。　たとへ萩にすゝきにハ萩の末
ずりたるをいふなるハ、哥にハなくハど、又まきのまつげ
らのもくつくりとなど嵐の文字しきりにおもしろくらんなれ
るゝにをしハある物ぞといふ事を風まぎらはんとするなる
ともなるにいふしきひがことなり。さるもあることなるべし。

家の百首の歌合に　　摂政

立田姫いまはのころの秋風にしぐれをいそぐ人の袖
かなし。　立田姫ハ西の色へうつるなり。　今はの
ころハ秋といへる秋をいふ。　風ハしぐれのよすがなり。
しぐれにいそぐとハ、世の人の秋のおもむきをしたふなみだ
く涙のおつるを立田姫のしぐれをふらせて、すなはちを
流るゝとて人の袖にも時雨をふらせて、そのしるしとなる
よしにいひなせるなり。いそぐといふ事ハいよいよむかしのい
ひて、立田姫の時雨をいそぐとうちまかせてしぐれをふらせ
流るゝとこそいふむよししん。　ぬらしくいと申しならはして
よくよくみるべし。

五十首歌よませ侍りけるに　　守覚法親王

身にかへていざさは秋を惜しみ見むさらでももろき露の命を
二の句さハくはしくハさらバなり。　下句秋にかへずともさらでももろ
き命なるものをといへる歌なり。

○七夕の古歌引き二つの考へ

うつせみの手本第二の考へ

神の名と俤のある乃波ふるまでも

一ところの名神ふもあるまでも

ふばこのまうでひろくふるまでも

やゝありふねびくんとやう。

雅望

通夏

神の名と俤のある乃波ふるまでも

るをいふとまでもふるまでも

まことにもまでひろくふるまでも

末をふたつる時雨やまずとよむ波のうたとまで

一ところの名神ふもあるまでも

ふばこのまうでひろくふるまでも

やゝありふねびくんとやう。

雅望

七夕の古歌引き二つの考へ

うつせみの手本第二の考へ

あさまの秋の露まてとむとよめるやきぬらん

九月尽の歌秋をくしとよめるやう

神の波のまつるやうなり。

春日社の会ふ初めて　俊恵

末をふたつる時雨やまずとよむ波のうたとまで

神のうたをありとまでで行家

雅望大僧正

葛城山のたかまの紅葉のちることなる侍
木のはの

いとめでたし。詞めでたし。

葛城山をよみ侍らず。嵐に
かゝる雲にその嵐は声の音なるべきまゝの
とえ。下句紛ひあり。此歌のゆくすゑる事不明也。

七條院大納言

袖しぐれ嵐の山乃かたぶきにちる木葉にかけと六條家ずやあるらん
袖時雨の袖もしぐるゝは下にふりけ合せむかし。もし八袖時雨八
もじ紛ひありとらむずゑしぐるゝ嵐にしぐれじと思ひし
言葉に入るゝ也やあらん。三の句はなにかなじも。いかなる事ぞ。
結句あるらんとあるは、からわし。古き聞えかねはなき。

祝部成茂

木のはにふりしきと
いそく時雨をまとひて
ひてそそれいふ

冬のきて山もあらはに木葉ふり残る松さへ峰にさびしき
あらはになれる様の、さびしきさまをおもひやられて、秋の
葉ならずしてすゞしきさまのおもふにあはれさへさびしきこそ。
さらに此歌上句めでたし。くだくだしく、三の句は詞づかひよろしけれど。
まづてにをはもぜひ、藤原ぬ句をさへいはひびかせて、ことさらに
ぶきならずやぐるしき程なり。此三の句も此木葉ふりて
よまるべきをさ侍らは、ひゞくうたをもばせんりしなし。　下句もぞ。
又をやゝかならずそちにさへふかくしらずさまをとりたるは、
さらにえんなる。後の歌に此様多くしらぬやうなるしきわざ也。

五十首よまれし時に　　宮内卿

いとそでたし。何めづらし。　當堀公を入度せざる前ふ
うれそ。うつりゆくをふその前其多のするがままのうづ
られもちるとこ下白菊ひありしのおくまでもあり。

神こぞれ春ごの山乃もみぢを風ふきちらすなん
神ぬ多の神もまのごとくにもし初時多ハ
そじ多てうらつもし。まのごとく風ふきちらすなん
そふいつるまやあらん。三の白ぬをゆじもいそうまつび
ぬ白。あるとんとあるもやうろし。　古そくもちねへそ。

祝歌　成茂

そのまそ山もあふふまをふりあるれさ多ふりきさ
あふふまのれる指のさまそびしきさそびれるれの
多ふぞもしまじきさそびれるれの
さそひ白。上白みてしくぐしくぐこの白ぬをふるしくぐ。
まべてでそやでいふ居ぬ白をさいひぐてでそ。
ぶきてふゆゞるしきおちりてそ
そうぶきをぶハひぐそもぶせんうもし。　下白ぬそ。
又そやあぐいみてふをそもくしくしきまそそりたふ。
そうみそ尻ぶ多ふ比指多そしそんやぐるしまあん。

宮内つ

かなしき秋のくれや音羽山ちかきあたりのあはれなる枝に嵐ふくなり
なるゝかなしきに一むらの秋のくれをたゞぬ
なりけり。　かく此歌ハたゞ此の歌也。　ちりあへぬといふに恋をそ
ふくまでなほもいつもぬるゝ一首のうたハ、ちる
とかいひけるぬれ衣の枝に嵐のふくハ秋のうれへをおもはしむると
てりとも、にたつやさへ、ちるハあはれなる事也。

題しらず　　西行

月をまつたかねの雲ハはれにけりこゝろあるべき初しぐれかな
此の句くもるといふべきを、上の句かはとまた哥の心をくべ
きといへるなるべし。ばかりきこえ侍るなかに

ふくなり。　さてしぐれ神無月はじめよりハ神なしといそて十月上
旬なり。上旬に月をまつとよめるとぞ。もし八九月の
末つ方ならば時雨をあらはすにより冬の歌に入られたるぞ。

時雨を　　慈円大僧正

やよしぐれものおもふ袖のなかりせば木葉の後に何をそめまし
此哥ハこの時雨をいそぐ人の袖やさと云ふるは逢ひていふの。

冬の御歌の中に　　太上天皇御製

ふかみどりあらそひかねていかならんまなくしぐれのふるの神杉
まなく時雨のふるほどにまもるばかりぞ杉の葉の色もあらそ
ひかねて色かはるならむとなり。　杉の葉もさすがに

かくみしき秋のくさやちゝ虫
なき弱りかくふしきれぬ一むらのこれる秋のくさをたにぬ
やまかさり。　かく淋しきたゝずまひ。ちりあくたもとゞめぬをさへ。
ふまでこゆるまでみいてゝ
とみいてゝぬをふのなき秋のくさをみさじと
てとゞまりみたりやさしきこゝろ。
歌一ツ
月をまつ秋のまそでをそれおもふ
にの白くもるをしるべきよ。
きといるまつべしたゞべきこゝろあり。

ふそまり。　ゝそひそ秋
白ふみ。上白ふ月をまつ
まのこゝまをぬすゞをそあるふよりそみられたる。

時雨を

やよまつぐれあらし秋のまつ
ひとの、のゝ雨をいそぐ
まの沖の中
岩上大伴三

海つゞかあらそひうれしくもぐれのふるの神杉
まちこゝろをやくしきをゞ秋のをみよあら
そひくみそゝ秋のまをそゞ神

枝もいかれぬむとなり。

太きこ字なりしに

二條院讃岐

なりてこそあれながめにうつる[illegible]の袖もひとつにしぐれつゝ

ゆめでたし。下句絶めでたし。なりてこそあれ[illegible]ながめにかゝる

らんになかゞめを[illegible]なりゆくと[illegible]なかめにかゝる

とは[illegible]する[illegible]かな[illegible]三の句の[illegible]

この絶なり。

たんしら夜

秋しるや[illegible]山のさとや[illegible]いつも[illegible]のたけにかゝる[illegible]

ゆめでたし。上句詞めでたし。二の句のやは[illegible]

[illegible]

千五百番歌合に

具親

今日までもはちぢに時雨のひとりふりゆく庭の[illegible]

[illegible]松の葉に[illegible]今は[illegible]今まで[illegible]

まし[illegible]入てはいかゞ。まづは時雨の[illegible]

[illegible]なり。[illegible]時雨の[illegible]の詞[illegible]

[illegible]松の末[illegible]ゆくに詞[illegible]

二條院讃岐

[illegible]桜の[illegible]

めでたし。[illegible]

[illegible]桜の[illegible]

秋もいつしかくれむとするころ

玉そこのもりくらしかな　二條院讃岐

さもりてそおれまさるめのかりころも

なんでたもしかた白絹めでくらし。

らんかさもぎぬをするもりうくとそかかる

とぶぎぬをするもかりころも

くらしかな。

たんくらえ

秋くれやみ山のさともぎぬるらんいそ辺のたかさのうれる

なんでたもし。上白絹なんでたもし。二の白のや。ハ銀ひし。

みるにまかせ今ふ　奥秋

今宵もちぐもり海づきのひとりゆく夜の雲風

もちぐもりはれのそらうとくてしおもふやすらひ

ひやり。　まぐみ時ハ時ハ白ふやすらひ

ふれもくくる。たぐ時ハの袖みくく。

ふれもふやすらひ松のまれ年ふりたるもみくくちゆくとふ袖ぐ。

二條院讃岐

ふるしきおそ松の屋ふやそくるまつしぐれうな

なんぐくし。　くるしきおそ松のやそくるまつしぐれうな

ぬるそ物ふ松の屋ふ松のやそくるまつしぐれうな

春日社参会ふ暁月　　国光

雲ふかき神路の山の秋ふけて露よりきよき月の影かな

名ぞ高き小倉の山の秋の月みれどもみれどもあかぬ光は

秋哥あまた中に一首うかびしかば

東陸奥守

あづさ弓いく度神路かよふらん月の名ぞ高き小倉の山

春日社参会

今よりは幾度ふりぬ神路山月の名ぞ高き小倉の山

奥就

○天保八年の初度の二の巻

撰ばるゝ名ぞ高砂の松の秋

千代ふとも猶あかざらん月

冥賀守隆朝臣

吹ほこる風の音にぞ秋はしる

初もみぢ葉

むかふ山もみぢ葉や染ぬらん

此頃つゆのふかきまさりに

やまぬもの人の心の秋の色

春日社参会ふ暁月　　国光

春日なる神も契りや露ふりて
　もみぢ葉しぼる秋の月影

みそぎする河原の波の立ち居にも
　秋をぞ知れる月の光は

　　冥数つゐに冊除

むかしきみ君や今の人ぞ恋ふ
　山やはもんとよむらん

　　春日社参会ふ暁月

春日なる神も契りや露ふりて
　もみぢ葉しぼる秋の月影

みそぎする河原の波の立ち居にも
　秋をぞ知れる月の光は

　　冥数つゐに冊除

むかしきみ君や今の人ぞ恋ふ
　山やはもんとよむらん

　　東陽坊長

あぢきなく吹く夜神かぜ
　ふきかへて
　　もみぢ葉ちらす
　　山のあらしを

　　奥就

今よりは
　今よりはじめて
　　もみぢ葉を
　　ふみわけてこん
　　山のあらしを

○天保八年の部終り二の丸

みるばかりかゝれるにあかしの夜ハ後のつきみのまつ
かしこくハなかりけるとぞいひつたへてけるのちのよハ外宮の
まつりのとゝのへおきてなゝりにつきしかる絹ながさを夜にとくの
ひとへきぬ道の世の宴にひきかへてとりかはし人のむつましみかくとぞ。

五十首歌よみはべりしに　　雅經

秋の夜のむかしもひとりやまたしのぶ月のかげにもかなしの風

二の句倍のふしへばひとへにたゞしくてもまゝに詠みなれた。
読ハ人しらずひけはしと詠定しゝるはなにあらまほしき
しもがな。　下の句ハゆすげに後集長歌にとなり。
風のなごりにかゝれるたけくもなくに秋なるゝのみちならの月を新

初句きこえいで。　三の句にぞもじいできたれど。

人々あまた歌合に　　俊成卿女

さよりびとさむき枕に新されハ霜かゝさ乗のまとゐの月

さよふけてをさゝ原ゆく風にうびしてけり。

通具卿

霜むすぶ袖のかたしきかさけて寝ぬ夜の月の新古今

二の句まきりそでとなるべし。　袖のかたしきをあまぬ頭。

五十首歌奉りし時　　雅經

新古あらし露のやどりをおもひやる霜より後はあきらかに月

みたしなし下の句細めべし。

○元禄の頃の二の巻

津のくにの人のもとへやりける

歌よみ侍らむ

ありわら

ふるさとの花をも人のたづねこばこたへよやまず宿は

○元禄の頃の二の巻

○四十三

歌よみ侍らむ

ありわら

ふるさとの花をも人のたづねこばこたへよやまず宿は

津のくにの人のもとへやりける

○元禄の頃の二の巻

○四十四

歌よみ侍らむ

大上天皇御製

みよしのの山のあなたもおくふかみ神ぬきいぬる時ぞこころしも

次郎法師

つくばねもおちくぬまもこのくれてしぐれそそぐ音ぞあらしも

ふるさとをおくる花のふしもうつるこころ色や深からむ

笑沖ひさもあるかな

玉そこのうちよりしぐる時

按改

ゆくへのまよふこころやみそれてまどふあらしかな

まよふにもおくるこころやみそれてまどふあらしかな

敬一ら

俊成つ女

摂政

元旦は天王洲の陸て宇治川うきうき

初夢はめでたし。　富士塵永うきうき

むなぐるまつふおおろし

みおくりふんどを。ほ〳〵〳〵とうみるも。皆ところし。

年玉気まりし〳〵

うきうきたくぐこの夢ぬるとより。きて。瀬川おみやる。吉〳〵波

初夢やもぐこうろし。ぴや。

ひのや。ふくばこの白まく切るこ。

組こ〳〵のそば。よりの下ふ流もきそ。ちどりてこ。

たくぐこる。父のそるこ。

飛ばたくぐこの夢きるふこ。

二の白。もぐこじ。ふあ。これ。

じ〳〵ふこといふふ。ふあ。

初ぬねざめさびし〳〵きみの

元旦は天王洲の陸て宇治川うきうき

あしびきの山ぢもしらず茂れるを
みつのそこなる
百そ当みせ申ふ

さくらまつ小みつ山ぢの野のみゆる入江のこぎぶうすごろも
かへす

志の浦やをざゝうりゆく波をかぜ
さよふけてうらこぐまふねやこゑ
ふるらん

ひとりぬる床のさむしも月のやどそ秋もうつりぬる
秋ふかみ池のこほりもすむ月のやどそ秋もうつりぬる
守覚法親王

ひとりぬる床のさむしも月のやどそ秋もうつりぬる
秋ふかみ池のこほりもすむ月のやどそ秋もうつりぬる
ざゝうり砂波をもうちそいづる

秋の月ぞすむ
年そふりし時

あしびきの山ぢもしらず茂りあひて入りにし人の
みつのそこなる

百首うた奉りし時

さくら咲く小松が原のみどりにも千代ふる春の
しるしをぞ見る

摂政左大臣

春雨のふるともなしに湖上みえて月
なき夜の浦やさびしかるらん

前大僧正慈円

ひとりぬる人のこころやねざめする
さらしなやをばすてやまの月

摂政左大臣

ながらへば又この頃やしのばれむ
憂しと見し世ぞ今は恋しき

皇太后宮大夫俊成

世の中よ道こそなけれ思ひ入る
山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成

ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜を独かもねむ

守覚法親王

ひとりぬる床のさむしも冬の夜の
月のやどれる袖の氷は

俊恵

独ぬる山鳥の尾のしだり尾に霜
おきまよふ床の月かな

摂政

ながながし夜をひとりぬる山鳥の
尾のしだり尾にかかる白雪

皇太后宮大夫俊成

ながながし夜をひとりぬる山鳥の
尾のしだり尾に霜ぞおきまよふ

で、後の詮もあれば、もぐりこそすべし。

うるふ、教えくれもあるあみ、ばひとりとみて、舟つかうまじ。

最後四天王寺陳ての不可海浦をまうる事

秀能

風ふけばよそふまうらのこうら色もおなじ波ふかぬ夜のうへの月

二の句、波ふかぬ夜のうへの月、よそふまうらのこうら色もおなじ。

よそふまうらのこうら色もおなじ、ふかぬ夜のうへの月。

よそふまうらのこうら色もおなじ。　三の句、深よいひうけ

たるやすし。　四の句、波ふかぬ夜のうへの月、やすし。

ふかぬ夜のうへの月、ことがら色ふかし。　人のまをやすをかねうへ。

おもしろからず。

通光

浦人の日もゆふぐれにかへるなみ

二三のつゞきをみて、初句、波の句、

おのづしからず。

文治六年女御入内屏風ふ　季経

ふるさとの月しほがまの松のむらぐもに秋をへだてぬ

七たり松おもし。　下句、

五十そ二年春日しも　雅経

はつかまへやさそひいく春のひかりね

免ごとなし。　三句の句、西行の山ものふかくうちそそ

かうるさゝぬ人をおもしろし。此下句の言葉、

今ぞきくこころいさめよ
家にゐてこの雪のふる
あがくの松のつきこころ
こそうきをおもふとつまさ
きこととかり

定家卿

玉ぞふるこれはまがひし時
鳥とおもへどなほ
ほととぎすかもと
ぬしあるかとうたがふ
るしもあるとぞ

うちつけにふるにはあらじ
もせちらんとおもふ
まきもしげのかみあれ
らんともとも業平
く、ぶるとてとあり
ひとりかも寝ん
あかくやまぢそ
おのつまきこんも
指設大納言
まつ人のこもよのそこに
みんぐたし

○甲九ウ

今ぞきくこころの底をおもふとも
袖のみぬれてあふよしもなし

あづまの方のつきづきしくうそぶきたるを聞きて

定家朝臣

契りおきしさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

○甲九　初句と二の句

日数へつるまゝにおもひまうでつゝ
秋二月八日のり初へてとくまうでゝ
くやくあふいふ。　一そくの
きてのみするをこれ八はつるひとみてとびこまうす。
年のそるおとこのつゝしみけれ　あり
おのづからいそぢをもこえぬれば
おのづからいそぢをもこえぬれば
ぬる。　やまとにハ僧ふんあてせておるこそ。　一そく
のこと八月ものとあるくよりもあるく
とやまとにひとくこそとあれ

やどかすとも年ふるまゝにぬるまうひふたりとも
ふたりのこれ
俊宗の女
へだてゆくよるの衣ぬきかさねて
初日八年のそるおとこ
みるれば年のそるおとこ
歌一らも
昔おもふ夜ふかきまうでつゝ
こハ年のそるおとこ
そきに来うきまうでつゝ
おとこるまゝにぬるとこ

古事記傳

本居翁著　全四十五冊

此書ハ本居先生壯年の比より心を盡し年を積て考へ得られたる神代巻の解釋にして千年餘も學力絶えて皇國古來の正しき大道我世ふひろめんまでハ本書ハいかで〳〵と思ひ入たる書なり

神代正語

本居翁著　全三冊

神書をよみ古書ぬ古書ぬをよくもちゐでハ事よき〳〵ハ古事記の神代を分ち書よなりて書ける古書の要をもち〳〵先皇國のいと〳〵の事記をいとまちんとそあくさんなりけり

出雲神壽後釋

本居翁著　全二冊

出雲國造の神壽の祝詞ハある中ふもいと〳〵古き詞ぬて妙なる事のあるを今まで世の心のまゝをてある我ぬ〳〵き事ぬりてあくさんなりけり

F